

朋友福田一志君を偲ぶ

吉 留 秀 敏

福田一志君（以下、失礼ながら“一志君”と略させていただきます）との出会いは1975年の春であった。それは入学した別府大学の考古学研究室歓迎会であったと思う。やがて宴も酣で自己紹介となり、目指す専門分野が同じ旧石器時代であり、高校生頃から野山を駆け回り、石器を採集していたのが、長崎県の一志君、福岡県の八尋実君（現佐賀県神崎市）、そして鹿児島県の私の三人であることが分かり、三人はすぐに意気投合した。特に一志君とは、高校時代に考古学のイロハを教わった先生が、同じ「カンジ先生」（故池水寛治、久原卷二両先生）であり、「なんだ、お前もカンジか！」と笑いながら言った一志君の言葉が今でも耳に焼き付いている。大学生生活の4年間はほぼこの三人でさまざまな（旧石器に関わる、私的な）活動をした。

活動は学内と学外であり、学内では二年先輩であった故富永直樹氏のアパートに押しかけ、剥離技術を学びたいと六畳一間なのにブルーシートを広げ、多久産サヌカイトを深夜まで割り続けたりもした。うるさいし、石屑（チップ）がシートを越えて飛び散り、さぞ迷惑であったろうと今では思う。

また、学外では3人共に出身地で多数の遺跡破壊を経験したこともあり、当時ほとんど実態が不明であり、補助事業による農地開発が進みつつあった大分県大野川流域の旧石器時代遺跡の分布調査を企画し、下流域の大分市や野津町付近から上流に向かって開始した。これには同意する多数の学生を巻き込み、週末、祝祭日を利用して実施した。しかし、広大な流域に対して作業は遅々として進まず、結果としてその後多くの旧石器時代遺跡の破壊を防ぐことが出来なかった。

そんな中、宮崎県児湯郡一帯を独力で踏査された大野寅夫さんの資料が、西都原資料館に保管されたことを知り、当時不明であった東九州広域の旧石器資料について、大野川流域との比較研究のため実測しようということになった。3日間毎日、別府、西都市間を一人で運転し往還した八尋君はさぞご苦勞であり、申し訳なかったのだが、同じ東九州でも約150km離れただけでこれほどの差異があるとは皆驚きであった。

また、一志君を通じて、長崎県平戸市の萩原博文さんが実施した中山遺跡、金柑茶屋遺跡の発掘調査にも参加させて頂いた。このとき初めて台風で身動きの取れない離島の苦勞も知ることも出来た。しかし、これらの調査で多くの研究者と知り合うことが出来たことは、何より得難い事であった。

卒業後一志君は教職、私は岡山大学を経て大分県文化課嘱託職員へと進み、再会する機会は少なくなった。ところが、私が再び岡山大学を経て1985年に福岡市教育委員会に入ると、予想外の展開となる。特に2000年以降は、私は発掘調査現場から本庁勤務となった。都道府県、政令都市を対象とする文化庁記念物課の会合や研修などで一志君との再会となったのである。聞けば一志君も暫くの発掘調査や博物館準備室たと担当を経て、県庁勤務となったそうである。どこか似たような人生を歩んでいると笑い合った。その後、九州地区担当者会議などで、毎年のようにどこかの庁舎で会うことになる。ちょうど地方への権限委譲、民間委託促進の嵐中でより良い埋蔵文化財保護行政の構築検討が進められていた。いち早く作られていた「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準」の改訂版の作成や、各種埋蔵文化財関連業務の審査基準などを九州管内で作成しようというものである。一志君はここでも研究熱心で連絡調整から司会役まで、素晴らしい仕事振りを発揮した。

一志君の学問的業績、行政的手腕をいちいち取り上げればきりが無い。一方、一志君は誰よりユーモアを好み、郷土長崎を愛していた。そんな彼に再会できないことが何より残念で辛いのである。